寄稿
個別寄稿

岡田　恭平
奥野総合法律事務所
アソシエイト弁護士

福島第一原子力発電所取材日誌
―東京の弁護士が見たイチエフ―

◆はじめに

2022年４月から2023年５月まで、東邦銀行グループに出向させていただき、１年２か月の間、福島市に居住しました。福島での生活の中で、フリーアナウンサーの大和田新さんと知り合う機会をいただき、2023年５月24日、大和田さんの福島第一原子力発電所取材に同行させていただきました。本記事では、取材内容の一部についてご紹介します。

◆浪江町津島地区

第一原発に向かう道中、浪江町津島地区を訪問しました。

浪江町津島地区は、第一原発の約30キロメートル北西に位置します。第一原発事故後、３月12日に国の避難指示が第一原発から10キロ圏に拡大され、浪江町災害対策本部会議の結果、町民は津島地区に避難することが決定しました。町民はその後、４日間津島地区にて避難生活を送ります。

しかし、３月16日、津島地区では毎時58.5μSV（マイクロシーベルト）と高度の線量が計測されました。国は３月12日時点で、津島地区がある第一原発から北西方向への放射性物質拡散

を予測しており、13日には津島地区の10キロほど東側で高い線量を計測していました。しかし、国・県からこれらの情報は何も伝えられず、町は線量を把握できなかったため、結果として浪江町民は線量の高い津島地区での避難を余儀なくされることとなりました。

12年間にわたり続いていた津島地区の避難指示は、2023年３月31日に一部解除されました。10戸の災害公営住宅も完成し、現在は５名が入居しています。

津島地区の中心部を訪問すると、震災によって家財が散乱した建物がそのままの状態で残っていました。スーパー、飲食店、旅館と建物は当時のまま残っているものの、再開の目途は立っていません。住人が戻らない限り、再開することは難しいものと思われます。

我々が復興住宅を訪問した際、家の周りで農作業をしていた住人の方とお会いすることができました。その方は、大和田さんの訪問に、「大和田さんよく来てくれたね。」と明るい笑顔で語りかけていました。「ここでの暮らしに不便はないのか。」との問いかけに対しては、「何の不

便も感じていない。」と答えてくれました。その方は、役場で働く息子さんと話し合い、津島地区へ戻ることを決意したとのことです。

◆福島第一原子力発電所

東京電力の広報担当の方々に、第一原発内を案内いただきました。

まず初めに、入退域管理等にて、入域手続を行います。運転免許証の確認、静脈認証により、本人確認が行われます。域内への荷物の持ち込みは厳しく制限されており、カメラ・携帯電話・PC の持ち込みは不可、筆記用具をはじめとする最小限の荷物のみ携行します。

入域後、WBC（ホールボディカウンター）を受検し、入域時の体内被ばく線量を計測します。退域時にも計測することで、同日域内でどの程度被ばくしたのかを確認することができます。なお、私の入域時のカウントは974、退域時のカウントは1026でした。入退時の差が1500カウント以上ある場合には精密検査が必要となりますが、私の場合は差がわずか52カウントでした。

大型休憩所にてブリーフィングを済ませた後、実際に構内を見学します。なお、大型休憩所は、2015年に完成した９階建ての施設です。それまで、作業員が休憩したり打ち合わせしたりするスペースがありませんでしたが、大型休憩所の完成により、温かい食事も取れるようになりました。2016年にはコンビニもオープンしています。

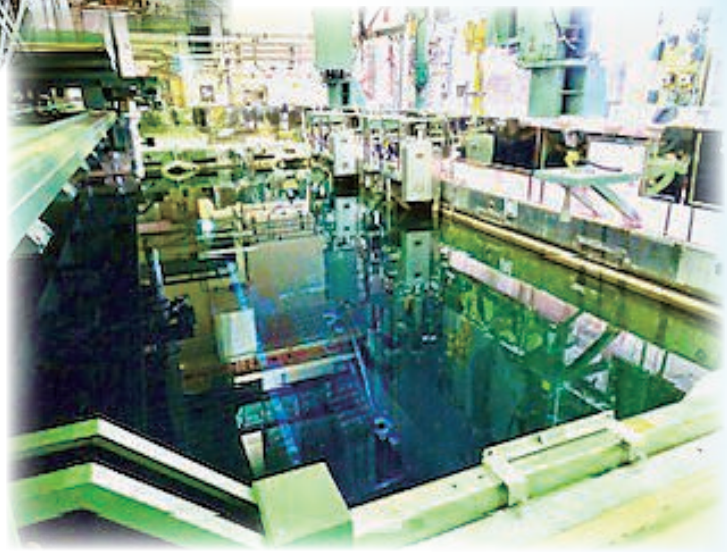
構内では、G 装備→ Y 装備→ R 装備の順に、必要な装備が定められています。G 装備は、普段着にマスク・手袋・ベストを付けるだけという軽装備ですが、現在は構内の大部分のエリアが G 装備で通行することができます。また、各自が個人線量計を携行し、域内での被ばく量を計測します。当日は約３時間構内を視察しましたが、私の被ばく量は20μ SV でした。

構内は専用のバスで移動します。初めに、１号機～４号機原子炉建屋の外観を俯瞰できるエリアを視察しました。２号機は、事故当時、隣接する１号機の水素爆発の影響により建屋のパネルが開き、発生した水素が外に放出されたため、爆発には至りませんでした。建屋外観は当時のまま残っています。爆発が起こった３号機・４号機は、現在は使用済燃料プール内の全ての燃料の取り出しが完了しており、建屋にはカバーが設置されています。一方、爆発が起こった１号機は、今も瓦礫がむき出しの状態となっています。今後燃料取り出し作業を行う際、瓦礫を動かすことで放射性物質が飛散することが想定されるため、現在建屋全体を覆う大型カバーの設置準備中です。

次に、多核種除去設備（ALPS）の外観を視察した後、ALPS 処理水海洋放出工事エリアを視察しました。当時、ALPS 処理水海洋放出に向けて、海洋放出エリアの工事が進められていま

【構内の写真】

（写真は大和田新氏提供）



した。

第一原発では、核燃料を冷やすため現在も注水を続けており、また、地下水や雨水が原子炉建屋内に流入するため、毎日約130トン（2021年度平均）の「汚染水」が発生します。汚染水は、セシウム吸着装置、多核種除去設備（ALPS）にてトリチウムを除く62核種の大部分が除去されますが、トリチウムを除去することはできません。トリチウムなど一部の放射性物質を含んでいる水は、「処理水」と呼ばれています。処理水は現在約134万トンあり、敷地内に設置されている約1000基のタンクで保管されています。タンクの容量は約137万トンで、2024年春頃にはタンクが満杯になると予想されています。

そこで、報道のとおり、現在処理水の海洋放出に向けて準備が進められています。東京電力

では、トリチウム以外の放射性物質の濃度が国の基準を下回る濃度になるまで処理を続け（二次処理）、二次処理した水はタンク内で循環・攪拌により均質化し、基準を満たしているか実際に測定して確認します。その後、残るトリチウムの濃度が放出の条件としている国の規制基準の40分の１を下回るように、処理水の100倍以上の量の海水と混ぜ合わせて薄めます。そして、海底トンネルを通じて、沖合１キロ先にある放出口から海に放出されます。放出設備には、不備があった場合にすぐに放出を止められるよう、緊急遮断弁が設置されています。

最後に、５号機原子炉建屋内を視察し、構内の視察を終えました。５号機原子炉建屋内では、原子炉格納容器（PCV）内であり、原子炉圧力容器の真下にあたるペデステルや、原子炉圧力容器上部に所在するオペレーティングフロア、使用済み燃料プールを実際に視察しました。

５号機・６号機は、１号機～４号機よりわずか３メートル程高い位置に設置されていたこと、発電機が海側ではなく山側に設置されていたこと等が原因で、爆発を免れることができました。

◆福島第一原子力発電所視察を終えて

第一原発内では、廃炉に向けて、2023年５月当時、毎日約4,500人が作業していました。２号機からの燃料デブリ取り出し着手に向けて準備が進められていますが、現在取り出しを試みている燃料デブリは、わずか耳かき一杯分程とのことです。また、取り出した瓦礫や燃料デブリの保管スペースも限られており、これらの保管後の最終処分方法もいまだ決まっていません。これらをふまえ、廃炉措置が終了するのは、2040年から2050年頃になるものと見込まれています。

処理水の海洋放出に向けた設備面での準備が整い、今夏にも処理水の海洋放出を開始することが予定されていますが、処理水放出による風評被害問題以外にも、廃炉に向けた課題はまだまだ山積しています。原発廃炉は、私たち１人１人に残された課題です。私たち１人１人が、適切に情報を収集し、議論し、行動することが必要です。

◆最後に

大和田さんをはじめ、福島で生活した１年２か月の間、たくさんの人々との出会いの機会を頂戴しました。福島の人々の温かさに触れ、福島の文化・食・酒・観光地といった魅力を感じ、福島は私にとって第二の故郷となりました。

この場をお借りし、関わっていただいた全ての方々に、感謝を申し上げます。